

[原著論文]

臨床実習生のアイデンティティ形成過程と「語り」

岡村太郎、櫻井浩治

キーワード： 教育、臨床実習、作業療法士、語り、アイデンティティ

Identity Formation Process and "Narrative" in a Student for Growing into an Occupational Therapist

Taro Okamura B.A., O.T., Kouji Sakurai, M.D.

Abstract

The student of occupational therapy has a problem in the composition process of identity as a professional. The problem of identity becomes remarkable especially while carrying out clinical practice. The purpose of this research is to clarify the composition process of students' identities. More over, we examine the requirement for identity to become a specialist. As a method, we performed the semistructured narrative interview to occupational therapists. We analyzed identity formation process from their experiences of clinical practice and created the chart of the formation process. The resistance "sense of values" is required for a clinical trainee's identity formation. In the identity formation process students experience the resistance "sense of values" and then start to notice new "sense of values." Thus, student to form the identity as occupational therapists. In order to establish an identity as an occupational therapist', it is important to interact with various persons at a clinical place.

Key words: education, clinical practice, Occupational Therapist, narrative, identity

要旨

作業療法の学生は職業的アイデンティティの形成過程で問題を抱えることがあり、それは特に臨床実習中、顕著になる。本研究の目的は、臨床実習における学生（以下臨床実習生）のアイデンティティの形成過程を明らかにし、さらに職業的アイデンティティの形成に必要な要件を検討する。

方法として、作業療法士に半構成的な面接を施行し臨床実習経験を語ってもらった。その臨床実習の経験からアイデンティティの形成過程を分析した。さらに、そのアイ

デンティティ形成過程のチャートを作成した。

その結果、アイデンティティ形成には「価値観」に関する抵抗があり、そこで、新たな「価値観」の気付きが起こる。それらの過程を経ることにより、作業療法士としてのアイデンティティが形成できた。このことから、臨床の場での他者との交流がアイデンティティ形成の重要な要件であることが明らかになった。

I はじめに

アイデンティティとは一般に統合された自我の状態を指し、その確立には、青年期までに形成されてきた同一化や自己像を再構成する過程が重要な意味を持つ。しかもこの過程では、個人が他者と離れて自立するというだけでなく、他者との関わりの中で、生き方や考え方を作り上げていく、ということが必要であり、自己の独自性を生かしつつ、他者との共通性を保つ過程だ、とも考えられる¹⁾²⁾。つまり、アイデンティティの形成では「自己と他者の関わり」の認識が大きく関わってくることになる。

こうした観点から作業療法士教育を考えた時、「作業療法の臨床実習生は、どのように作業療法士としての可能性を他者との関わりの中で取捨選択するか？」という臨床実習生の心理過程を把握することは、作業療法士教育のカリキュラムを作成する上で、極めて有意義な意味を持つことになる。

著者らは今回、作業療法臨床実習を通して獲得されていく職業的アイデンティティの形成過程を、「語り」の形態を利用して明らかにすることを試み、若干の知見が得られたので報告する。

「語り」を用いたアイデンティティ研究の方法としてアイデンティティ・ステータス・アプローチがあげられる³⁾⁴⁾⁵⁾。この方法は、いくつかの質問項目からなる半構成的な面接を用い、語られた言葉を分類、分

析するのであるが、この研究では、特にアイデンティティが形成される過程に注目し分析を行った。

II 方法

1 対象（以下、臨床実習生とする）

臨床実習生のアイデンティティ形成過程を捉えるため、予備面接の中から臨床実習の失敗と成功を経験した例を選択した。選んだ根拠は、他者との関わりの中でアイデンティティ形成の様子がよく現れているためである。この臨床実習生は女性で、大学卒業後〇県にある3年制作業療法士養成学校に入学する。3年次の臨床実習当時25歳であった。

この臨床実習生の学校では1期と2期に7週間程度の臨床実習があるが、2期目（精神障害分野）が不合格であったため、再実習として3期の臨床実習を施行している。インタビュー時、彼女は作業療法に従事し1年経過していた。

（プライバシー保護のため本質に関わらないところは書き換えている。）

2 「語り」採取の手順

面接は約90分程度である。面接者は第一筆者が施行した。面接時に下の表1の要領で「質問と確認事項」として説明し、了解を得る。面接は質問事項にそって半構成的面接で施行した。

表1 「質問と確認事項」

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習前あなたは臨床実習についてどう思っていましたか？ 2. 各期の臨床実習中、それぞれ「やだなあ」あるいは否定的になった思いをあげてください。またそれぞれの実習で「よかった」あるいは自己実現できたことをあげてください。前後の話も含めてできるだけ詳しく語ってください。 3. 現在の臨床実習に対する思いを語ってください。ただし、途中放棄してもかまいません。また、語りの内容はテープレコーダーに録音し文章化します。 4. 後日、文章化したものを再度ご覧頂きます。訂正したいことや言い残したことを述べていただきます。 5. 事例として研究論文になることをご了承ください。 |
|---|

3 分析方法

臨床実習生の「語り」は以下の手順でまとめた。

- 1) 時期により①臨床実習前の「語り」、②各臨床実習を1期・2期・3期に分けた「語り」、③臨床実習後、作業療法士として働いている現在の「語り」に区分した。
- 2) 上述した「語り」をさらに関わる要素(本人、作業、人、集団、場、時など)に分類しタイトルをつけた。
- 3) その中で類似したものを集め、タイトルをつけた。
- 4) タイトルの類似性がなくなるまでその作業を繰り返した。
- 5) 最終的なタイトルを各時期の主題とした。

集約しタイトルを付記するとき現象学の〈本質観取〉の方法を参照にし、以下の3項目を満たすことを条件とした⁶⁾。

- ①様々な思いこみや通念を避ける。
- ②自らの具体的な体験を思い浮かべつつ、それに当てはまる〈本質記述〉としてのタイトルを探す。
- ③付記されたタイトルが自分だけの体験でなく他者にも共通する一般性のある言葉になっていること。

面接の約1ヶ月後、以上の手順を踏んで文章化とタイトルを付記したものを、対象者に見せ、修正、確認を施行した。(文章化に際して「」は臨床実習生の言葉のまま、()は筆者補足、[]は面接者の質問とした。)

Ⅲ 結果

1 臨床実習に行く前の印象についての「語り」

1) 主体としての本人の要素

タイトル：未知の他者と関わりを持つ事への自信と不安

「気持ちの上で大丈夫だろうと思っていた」
 「行く前からイヤだと思っても仕方がない」
 「恐怖感をもたないようにする」
 「バイザーもいじめてやろうという人はいない」
 「(実習に行っても) とって食われはしない」

2) 人(学校教員)の要素

タイトル：学校からの客観的でフォーマルな情報

「各実習が7週間、身障と精神の実習で各1回行われる」
 「3回目の実習は2回目の実習が評価もらえなかったのもう一回精神科をすることになった」

3) グループ(同級生)の要素

① 1期目の身体障害者分野の実習について

タイトル：1期目の身体障害者分野の実習は大変でないが不合格になることがある

「悪い話はなかった」
 「評価実習で行った人からはそんなに大変なわけじゃない、そんなにきつくないと聞いていた」
 「(落ちた先輩から) その人から話を聞けなかった」
 「前に行った人がダメだった、落ちたところ」

② 2期目の精神障害者分野の実習について

タイトル：2期目の精神障害者分野の実習は大変で不合格になることがある

「実習施設がきまるとあーだこーだ

と（先輩から）言われる」
 「前情報としてバイザーによって当たり外れがある」
 「先輩から（実習から）戻された人がいると聞いていた」
 「実際に行ってみて看護婦さんから（スーパーバイザー）担当を聞かれ『かわいそうに』と言われた」

③ 3期目の実習（精神障害者の分野）について

タイトル：3期目の精神障害者分野の実習は安全

「あそこなら大丈夫」
 「楽しく実習ができるところ」

2. 1期目の臨床実習についての「語り」

1) 作業（実習）の要素

タイトル：パソコンが悪いから緊張した

「持っていたパソコンがトラブル続きで緊張感があった」

2) 人（スーパーバイザー）の要素

タイトル：スーパーバイザーは怖い

「スーパーバイザーが怖かった」
 「（第一）印象がよくなかった」

3) 人（患者さん）の要素

タイトル：私（臨床実習生）が作業療法すると患者さんが変化してうれしい

「患者さんとゆっくり関わったことが実習してよかった」
 「activityを提供して変化が見えるんだと感じてもらえたこと」
 「患者さんの回復の過程の変化というより気持ちの上での変化がみられたこと」

4) 時の要素

タイトル：家庭の事情で実習がうまくいかない

「（臨床実習生の）父が入退院を繰り返していた」
 「言い訳にならないのは自分でわかっていた」

3 2期目の臨床実習についての「語り」

1) 人（スーパーバイザー）の要素

タイトル：スーパーバイザーが嫌いだ

「スーパーバイザーから（初めて会ったとき）『大卒なんだ』と言われカチンときた」
 「（大卒を）ひけらかすつもりもないし、情報の一つ（と考えている）」
 「相手（スーパーバイザー）に対してイヤだと思った」
 「自分（実習生）の意としてない受け取り方を（スーパーバイザーが）する」
 「努力をしたってどうせ（スーパーバイザーには）わかってもらえない」

タイトル：友達はスーパーバイザーと問題なく関係がとれている

「病院（実習の）最後に病院のお祭りみたいのがあって、他の臨床実習生はバイザーといっしょに来ていたのに自分はバイザーと行かなかった」

2) 人（患者さん）の要素

タイトル：人の多様性の発見

「担当している患者さんに会いにいったとき、問題行動が見られなかった患者さんが最後に病棟へ行った時怒鳴られたんですね。それまですごいおとなしい方だったので『怒鳴っちゃって』と落ち込んでいたが、最後には『あーそうなんだあ』と思った。ちよっ

とびっくりしたのもあるけどそういうことって本当にあるんだ。自分が接している短い期間にみえなくても長く接しているとみえるというか出てくることもあるんだということ。」

い、教科書には正解はないけど間違ったことも書いていない』と言われた」
「何度読んでもわからないから聞いたんだ。それでわかったらあなた(学校教員)に聞かないと思った」

3) グループ(施設の職員)の要素

タイトル: 他職種や作業療法士の多様性の発見

「いろんな人と話ができ、良かった」
「バイザー一人についてるんじゃなくて木工やっているグループや園芸やっているグループがあって(それぞれの作業療法の)ポジションの人と話ができ」

6) 時の要素

タイトル: 作業療法士としての責任や立場の意識

「(患者さんに対して臨床実習生だから思えたが)勤務だとまた(患者さんの)違ったことが見えると思う」

4) 場の要素

タイトル: 家庭の事情と実習の分離の了解

「実習は住み込みでやっていたので家のことは(関係)なかった」

7) 主体としての本人の要素

タイトル: スーパーバイザーとの関係修復の挫折と臨床実習の放棄

「担当(患者さんの作業療法を)すすめなきゃいけない(という思いがあった)」
「2週間まで(スーパーバイザーとコミュニケーションを)がんばってたつもり」
「スーパーバイザーとコミュニケーションが成り立っていると患者と関わる時間ができなかった」
「(そのためスーパーバイザーとコミュニケーションとる)努力を放棄した」
「無力感になってきた」
「(スーパーバイザーから)実習する気があるのかと言われた」
「イヤだなー。ここから飛び降りたら死ぬと思った」

5) 人(学校教員)の要素

タイトル: 臨床実習の挫折

「教官が呼び出された」
「(スーパーバイザーが)このまま続けても(実習としての)評価はつけないと言われた」
「(臨床実習生である私は)最後まで続けますと言った」
「施設で職員について見学することになった」
「(受け持ち)患者の担当を外された」

4 3期目の臨床実習についての「語り」

1) 主体としての本人の要素

タイトル: 悪くない臨床実習だった

「イヤだなと思ったことはない」

タイトル: 学校教員への不信

「呼び出される前に一回教官がきた」
「3年生になってから来た先生なのでよく知らない」
「『困ったときには教科書に返ればい

2) 人(臨床実習生)の要素

タイトル: 治療関係は良好

「患者さんからストーカー呼ばわりされたことがあるがイヤだなとは思わなかった」

3) 時の要素

タイトル：コミュニケーションに問題があることの自覚と実習の慣れ

「3回目になると気負わないでいつてきた」

「(1回目・2回目の実習は) スーパーバイザーとのコミュニケーションをうまくいかないことは乗り越えていない。行き違いがあった事実はある程度消化出来たんじゃないかな」

5 臨床実習に対する今の思いについての「語り」

1) 主体としての本人の要素

タイトル：臨床実習を肯定的に捕らえ、「価値観の転換」が起こる

「いいことも悪いことも、何度死んでしまおうかと(思ったことも)いい経験だったと思える」

タイトル：自己の認知について他者との関わりを通じて了解

「(面接者) なぜそう思えるのでしょうかね?」

「自分ができないと知っていてもわかってない部分がある」

「自分が人と関わって行ってそれが患者さんであっても他の人であっても未熟であるっていうか人との関わりで足りないことを知っていても身にしみてわかることがなかった」

タイトル：自己を客観視でき視点の転換が起こったのは3期目

「(面接者) そう思えたのはいつ頃ですか?」

「(2回目の) 実習の時は思えなかったが3回目の実習が終わりごろ」

「2回目のスーパーバイザーは悪い人じゃないと思う。悪い人じゃないというのはわかっているんだけど、実習の時点では私が(やっていることの) 正当化しようとしてしまう」

「自分は悪くないというのがベースになっていたと思うんですね」

「その行き違いを客観的にみれるようになったのが3回目の実習がうまくいったからそう思える」

タイトル：対人緊張が臨床実習の障害となった

「(3回目の実習は) ほったらかしに近かった」

「自由な感じがして思うようにしゃべれる」

「『(自分の) 緊張が高いと思っている』ということをしてしゃべることができる」

「相手の(スーパーバイザー)のトーンが問題(だったのではないか)」

「(スーパーバイザーから)『(2期目の実習を) 落とされたんだ』といわれても『そうなんです』と言えた」

タイトル：私のコミュニケーションの方法に問題があった

「自分が思っていることを言葉にして伝えることが得意じゃない」

「言ってみて、この言葉は違う。言い直してこの言葉は届いていないな。また言い直してという風なことがあった」

「相手の考えていることはわからないけど自分のことが伝わらない。言い方が悪かったのかな?」

「そういう効率の悪さはあると思

ます」

2) 人 (スーパーバイザー) の要素

タイトル：スーパーバイザーとのコミュニケーションのとり方も障害になった

「(スーパーバイザーには) もうちょっとゆっくり話を聞いてほしかったな」
「話をしても (スーパーバイザーが) 『こうなんでしょ?』 (私が) 『違うですけど』『こうなんでしょ?』のくりかえし」

分析の手順に従って、タイトルの集約を繰り返し図1のようになった。

IV 考察

1 臨床実習に対する、行く前の印象の「語り」より

主題：[「自信」と「不安」]

臨床実習生は臨床実習に対して、未知の他者と関わりを持つ事への「自信」と「不安」を抱く。臨床実習にでる前のアイデンティティを形成する上で関わった他者は友人・仲間・学校の教員などである。これらとの関わりの中から得られる情報は、インフォーマル、フォーマルに関わりなく、実体験を伴わない伝聞にすぎない。そのため「不安」が生じる。一方、不安を解消するため、都合のよい情報を取捨選択し、「自信」を形成した過程が見受けられる。インフォーマルで否定的な情報が多く含まれる施設は、実際、不合格であった。

臨床実習生は、能力で合否や難度があるのでなく、臨床実習施設により難度(合否決定)があると認識していることに注目したい。

2 臨床実習についての「語り」より

臨床実習開始時

臨床実習生がアイデンティティ形成過程で関わる他者の変化がみられる。それは、伝聞の世界にいる学校の友人・仲間等から臨床の実世界で作業療法士として働いている他者へと広がった。ここでの課題として、学校の友人・仲間との関わりからスーパーバイザーとの関わりへと関係性の再構築がなされる。

主題：[指導者への不信と自己の挫折感]

1期2期のスーパーバイザー、特に2期のスーパーバイザーは学校の友人や仲間とは生き方の異なる人物として登場した。学校の友人や仲間とは違う生き方をする作業療法士と出会うことで臨床実習生の生き方への抵抗が見えてくる。しかし、1期2期のスーパーバイザーの関係は良好とはいえ、「患者さんとはうまくいくけど道具や他者が悪い」・[指導者に対する不信と自己の挫折]といったスーパーバイザーや学校教員への否定・不信の感情が現れている。今まで培ってきた学校でのアイデンティティにしがみつき、指導者に対する不信や自己の挫折感から、「イヤだなーここから飛び降りたら死ねると思った」という感情が生まれた。

主題：[他者の多様性の発見と専門職としての自覚の芽生え]

一方、専門職として働いている他者との出会いにも注目したい。これらの人と接することで[他者の多様性の発見と専門職としての自覚の芽生え]がみられはじめた。これは、「価値観の転換」の芽生えとも言える。

主題：[他者との関わりに挑むことで成功体験]

3期の実習で初めて自己の問題点(コミュ

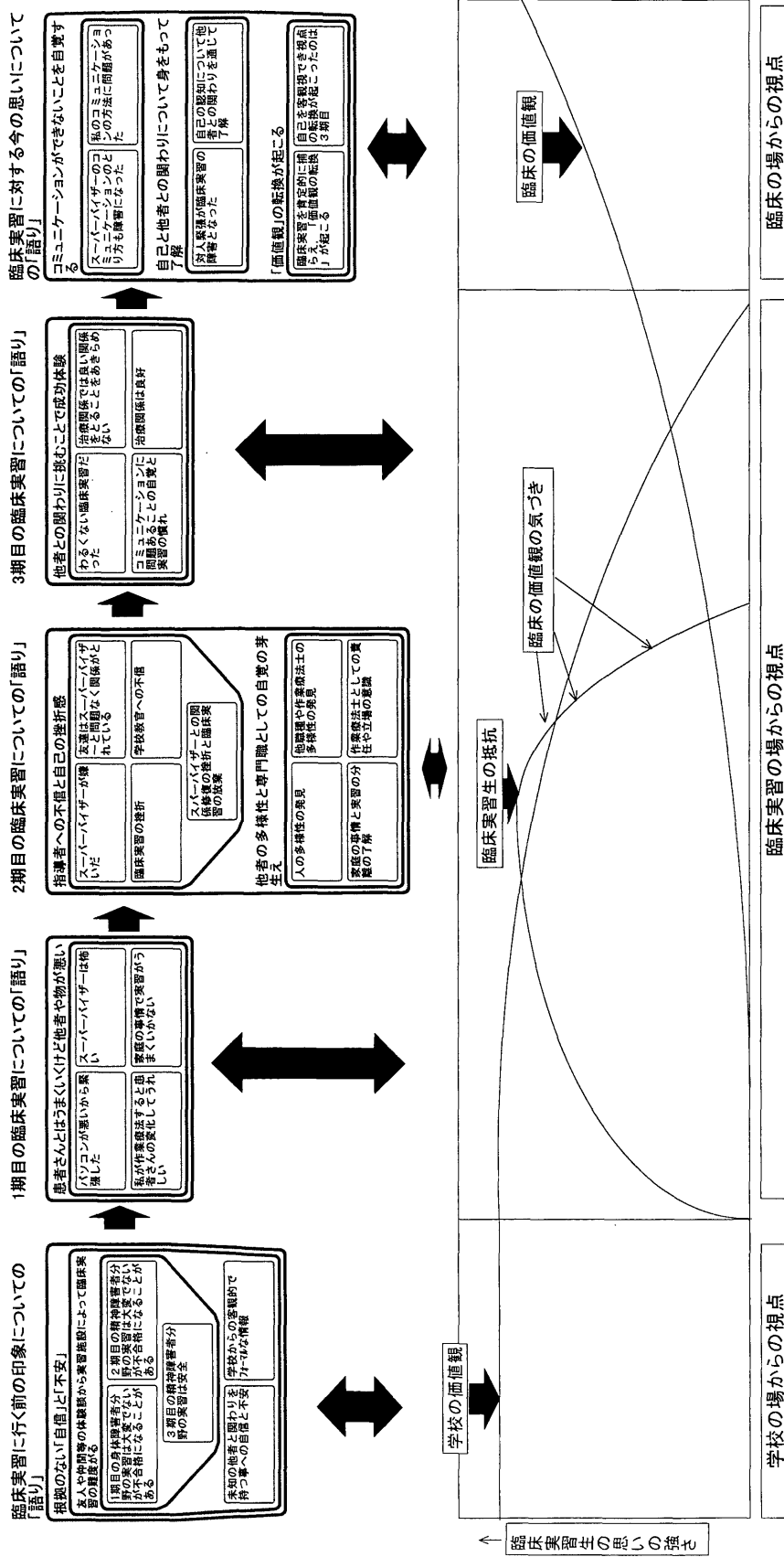


図1 「語り」の分析結果

ニケーション)の気付きがあり、スーパーバイザーと良好な関係を保つことができた。作業療法士としてのアイデンティティが地平に立つ点として現れ、学校の友人や仲間の役割は点から地平へと変化していった。地平へと変化してもその友人や仲間は臨床実習生の地としてアイデンティティの支えになる。今まで培ってきた価値観や学校の友人や仲間から分離しつつも、それらの存在あるいは生き方を否定するのではなく関わり方を再構築する過程が展開された。

作業療法アイデンティティには共通するものがある。スーパーバイザーから患者さんまでそれぞれの「生き方」に出会えたことも大きい。臨床実習生はスーパーバイザーと一部の価値観を共有することにより、それが呼び水となり、価値観の転換につながった。また、3期スーパーバイザーのみの力でなく、それまで他のスーパーバイザーや他の作業療法士などとの出会いを経過することにより、それぞれが「価値観の転換」の触媒としての役割を果たしていたと考える。

3 臨床実習に対する今の思いについての「語り」より

主題：[他者との関わりについて身をもって了解]

価値観の転換を促す触媒的な要素をもった他者と出会うことより、学校の友人や仲間の視点から作業療法士としての臨床の視点へとシフトしていく。

主題：[コミュニケーションができないことを自覚]・[「価値観の転換」が起こる]

今までの自己の価値観を再構築するには、この両者の間で自己否定的な要素を経過する必要がある。しかし、他者と交わることで他者の多様性の発見、そして自己の問題への気付きから、「価値観の転換」が起こり始める。

V おわりに

臨床実習生のアイデンティティ形成過程の様子を、「語り」を通して具体的に記述することを試みた。アイデンティティ形成過程を量的研究で述べることも重要である²⁾。しかし、アイデンティティ形成過程は、「臨床実習生の主体性」「人」「作業」「場」「時」等様々な要素が複雑に影響しあって成熟する。これらは質的な要素を多大に含んでいる。「語り」には、対象者の主観的な事実を他者である我々が知ることで、臨床実習生への関わり方・指導方法の手掛かりを示唆する豊富な内容が含まれている。作業療法士育成に際し、「語り」によるこうした個々の分析の集積もまた重要であることを考え、今後、他の事例にも試みる予定である。

文献

- 岡村太郎 河田誠 竹下亜希子 他：「適性がない」と言われている学生の理解－枠を利用する事について－ 高知リハビリテーション学院紀要 1, 25-32, 2000.
- 岡村太郎 石元美智子 大塚貴英 他：臨床実習における情意領域の評価－TEGとPOMSを使用して－ リハビリテーション教育研究 4, 15-18, 1999.
- Marcia, J. E. : Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3, 551-558, 1966.
- Uwe Flick : 質的研究入門－〈人間の科学〉のための方法論, 春秋社, 東京, 2002.
- 杉村和美 : 青年期におけるアイデンティティの形成 : 関係性の観点から捉え直し 発達心理学研究 9, 45-55, 1998.
- 西研 : 哲学的思考－フッサール現象学の核心－, 筑摩書房, 337-383, 2001.